

企画展「秋田のくすり今昔物語」展示報告

浅利絵里子*

1. はじめに

当館では、常設展示の他、年3回の企画展と1回の特別展を開催している。本稿では平成26年2月1日から4月6日にかけて開催した企画展「秋田のくすり今昔物語」について展示内容と調査の概要、来館者アンケートの結果を報告する。

2. 展示趣旨

人類が誕生してから今日まで、死や病との戦いは続いている。病苦をはじめとする災禍から逃れるために祈禱を行い、様々な動植物を薬として利用し、多くの経験の中から健康維持のための英知を築いてきた。その中には現代科学の観点から、必ずしも効果があるとは言えない薬や方法もあるが、多くは各地の自然や生活と密接に関わり、人々を救う手段として役立っていたと考えられる。飛躍的に医療環境が向上し、時間や場所を選ばず薬が手に入る現代において、秋田県内でもこれらの医療文化は少しずつ失われようとしている。今も山野で採れる薬草等の効能を把握し利用している人はいるが、そのような知識は家庭や地域で継承されることはあまり期待できないのが現状である。

筆者の調査では、調査協力者から医療知識の収集を期待する声や、今を逃すと知識の伝承が二度とできなくなると危惧する声が多く寄せられた。

そこで過去の秋田県の医療について「くすり」をキーワードに幅広く紹介すること、多くの県民から意見をいただいて、共に医療文化を掘り起こすことをこの展示の主たる目的とした。

3. 展示担当者、協力機関

展示は当館民俗部門が中心として行ったが、その他複数の部門（考古・歴史・生物・地質）、館外の多数の団体・個人から協力を得た。多くの方から協力を仰ぎつつ、資料やそれらに付帯する情報を収集した。主な協力機関は次のとおりである。

<協力機関>

株式会社ツムラ 株式会社八幡屋礒五郎 株式会社龍角散

<後援機関>

秋田県医薬品卸業協会、秋田県病院薬剤師会、一般社団法人秋田県医師会、一般医社団法人秋田県医薬品配置業協会、一般社団法人秋田県薬剤師会

4. 調査結果

当館での所有している薬、医療に関する歴史資料の主たるものは、茂木家資料（湯沢市）、舩屋薬局資料（秋田市土崎）であった。県内の薬の歴史を“モノ”で辿るためには、様々な資料を収集する必要があるが、過去の県内開催の展示等において医療に関する資料が公開される機会は少ないのが現状であった。

秋田県内の薬に関わる資料を広い時代幅で展示するに当たり、次のような情報を求めた。

- ①薬に関連する考古資料
- ②僧医・修験者の治療および本草学に関する資料
- ③近世文書における薬の記述
- ④近代の薬局・薬店に関する資料
- ⑤県内の薬草（民間薬）、家伝薬、生薬栽培に関する資料
- ⑥薬に関連する研究者の資料

次に項目ごとに、要点を記すことにする。

- ①考古資料では、疾病の痕跡を示す資料を確認したが、薬の製造に関する直接的な資料は見つけることは出来なかった。そのため薬に関連する資料として薬師如来の持つ薬壺と形状が類似する壺を展示した。また人形、馬形、墨書土器等の魔除け・厄払いの儀礼に用いられたと考えられる資料を展示した。
- ②神社が薬や医療にどのように関わったかを調査するために、県内の神社8社から聞き取り調査を行ったところ、唐松神社（大仙市協和）では過去における製薬・販売の事実が確認できたが、

*秋田県立博物館

それ以外の神社においては、「製薬はしていない」もしくは「分からない」との回答であった。また、寺院に係る薬資料として、笹原本誓寺（秋田市）で製造販売されていた薬の効能書きの存在を確認した。

③秋田県公文書館にて古文書を調査し、江戸時代以降の薬に関する事実が記載された資料の存在を確認した。その一つが日記であり薬の処方名称を見つけることができる。『岡本元朝日記』『北家御日記』『渋江和光日記』『初岡敬治日記』等に薬の利用を確認した。『佐竹家御秘法御製薬処秘方丸散薬法書』や『旧秋田藩御内務方秘方』には、薬の処方名と構成生薬、分量が記されているのを確認した。

④県内で明治期～昭和初期から営業している薬局のうち8店に話をうかがったところ、山田相談薬局（秋田市）、坂本薬局（仙北市角館町）で戦前戦後の薬局の様子を聞くことができた。また坂本薬局、村田薬局には資料が豊富にあった。歴史があって、資料を保持していても、代が替わると資料に付帯する情報が失われる例があるが、今回の県内薬局の調査では、過去の情報も多く収集できた。

⑤民間薬（薬草）の利用については、文献の他、男鹿市と仙北市角館、秋田市で聞き取り調査を行った。本展の開催時期に、県内では市町村の生薬栽培への取り組みが話題となった。日本の伝統医療において使用されてきた生薬の原料を国内に求めようとする動きが出始めたためであ

る。町の協力を得て取り上げることにした。

秋田にゆかりのある家伝薬を作っていた事例として、北秋田市阿仁の阿仁マタギの薬、大仙市太田町の消炎散、北秋田市根田の根田薬、龍角散を確認した。阿仁マタギの中には秋田県製薬株式会社の創立に関わった人がいる。この会社の商品には、県内の著名な家伝薬が取り込まれているので、残されている薬袋、薬の名称や効能書き等の情報は、県内の家伝薬を調べる上で貴重な資料になると考える。参考資料として表1～3に重要有形民俗文化財「阿仁マタギの狩猟用具」のうち、明治時代の行商行李に収納されていた薬袋、薬から得られる情報の一部を示す。表1～3以外に、秋田県に関連のある薬として次のようなものがある。

■県内の薬

人参清血散（三種町天瀬川）、消炎散・龍起散（大仙市太田町）、源太膏（横手市十文字町植田）、根田薬（北秋田市根田）、小田野家の目薬（仙北市角館）

■秋田にゆかりのある薬

龍角散（東京）、錦袋円（東京）

⑥薬に関連して活躍した人は、医師として活躍した人物をあげれば多くなるが、本展では薬を飲むときに必要なオブラートを発明に関与した山下太郎氏、世界でコレステロール値を下げる薬として多用されているスタチン製剤の礎を築いた遠藤章氏をとりあげた。

表1 弘生堂（秋田県北秋田郡大阿仁村）薬袋

	薬名	薬袋に記載された効能
1	霊将湯	子宮病、さんぜんさんご、血の道一切
2	大正散	胃痛、腹痛、下りはらの薬
3	牛馬くすり	牛馬のないら、むしやみのくすり
4	回生散	きつけ、あつさあたり、むしばの妙薬
5	外用鎮痛液	うちみ、かんせつ、りうまちす、神経痛妙薬
6	セメエン虫下し	大人子供のむし下し一切
7	トンプク風薬	かぜねつさまし一切
8	目薬	逆上目、つかれ目、ただれ目、トラホーム、眼病一切
9	去痰圓	たん、せき、ぜんそく専門
10	熊胆圓	はらいた一切

昭和15年の使用歴有

表2 秋田県製薬株式会社（秋田市豊島町）薬袋

	薬名	薬袋に記載された効能		薬名	薬袋に記載された効能
1	活強剤	肺病助膜	16	狼胆散	風引一切
2	猿頭ミッテル散	神経痛、脊髄	17	秋田メンタム	すり傷、切傷、凍傷、火傷
3	大正散	胃痛、腹痛	18	アミド軟膏	皮膚疾患、化膿性創傷
4	牛馬専門薬	牛馬病一切	19	秋田メンタム	胃カタル、胃病一切
5	ふり出し血の薬	子宮血の道、	20	アキタ胃散	トラホーム、眼病一切
6	回生散	毒消し	21	アルト目薬	風熱サマシ、頭痛
7	活腸胃散	胃病一切	22	小児下痢止	下痢、腸カタル
8	子宮白血散	子宮病、血の道、産前産後	23	せき薬	タンセキ喘息、百日咳
9	風薬	熱解、鎮咳	24	小児せき薬	タンセキ喘息、百日咳
10	ハールト	心臓腎臓	25	鎮痛散	頭痛歯痛神経痛
11	中風薬	血圧高進、中風一切	26	粉末エックス	感冒肺炎等 湿布剤
12	猿頭散	頭痛眩暈のぼせ	27	腹痛トンプク	ハラ痛 胃病
13	猿児散	子宮病、血の道	28	安眠散	寝小便
14	ヘモグロビン	補血、強壮	29	救命丸	小児、瘡の虫一切
15	活脳	脳病一切			

昭和30年の使用歴有

表3 北秋田市阿仁 鈴木家行商行李中の薬

	薬名	記載された主治効能用法	記載された主要成分	製造元
1	大正散	胃痛・腹痛・胸痞・溜飲・胃傷如答児・悪心・嘔吐・其他胃腸病一切の良薬なり	マグネシヤ、乳糖、ゲンノショウコ末、熊の胆、牛胆	秋田県製薬株式会社
2	大正散	胃痛・腹痛・胸ヒ・溜飲・胃傷如答児・悪心・嘔吐・其他胃腸病一切の良薬なり	マグネシア、乳糖、ジンノショウコ末、熊胆イキス、牛胆	秋田県製薬株式会社
3	大正散	胃痛・腹痛・胸ヒ・溜飲・胃傷如答児・悪心・嘔吐・其他胃腸病一切の良薬なり	マグネシア、乳糖、玄草末、熊胆、牛胆	秋田県製薬株式会社
4	大正散	腹痛・胃痛・胃痙攣・食傷・胃腸カタル・溜飲・悪心・嘔吐・しぶり腹・二日酔い	酸化マグネシウム1.0g 乳糖5.0g ゲンノショウコ末0.0g ユウタン1.0g 牛胆3.0g	秋田県製薬株式会社
5	大正散	消化促進・消化不良・食欲不振・食べ過ぎ・もたれ・胸つかえ・整腸・軟便・便秘・消化不良による胃部腹部膨満感	日局酸化マグネシウム0.2g 日局ユウタン0.25g 牛胆0.25g 日局ゲンノショウコ末2.0g 日局乳糖0.3g	秋田県製薬株式会社
6	解熱散	風邪・解熱・発熱・感冒・頭痛	日局アスピリン1.0瓦 日局フェナセチン0.5瓦 日局薄荷脳0.01瓦 澱粉0.5瓦	大阿仁製薬所
7	解熱散	風邪・解熱・発熱・感冒・頭痛	日局アスピリン 日局フェナセチン 日局薄荷脳 日局澱粉	大阿仁製薬所
8	アミド軟膏	化膿性ただれ・連鎖状及葡萄状球菌に因る皮膚疾患・腫物・面疔・とびひ・乳腺炎等によし	スルファミン5.0g 亜鉛華5.0g 硼酸軟膏88.0g 朱2.0g	秋田県製薬株式会社
9	むし下しセメンエン	回虫の駆除	日局サントニン0.05瓦 日局ピサチン0.01瓦 日局乳糖0.45瓦	大阿仁製薬所
10	回生散	暑傷 舟車 酒酔 眩暈 菌によし	日局カンフル 白糖 澱粉 薄荷脳 赤色硫化硬	秋田県製薬株式会社
11	牛馬くすり	第一牛馬の毒消し、腹痛み、たんせき、下痢に最も良薬なり	重炭酸ソーダ、炭酸石灰、延命草、陳皮末、アセトクエリード	秋田県製薬株式会社
12	愛馬散	牛馬のないら及すぢないら、せき、骨軟、食欲不進、消化不良、胸腹つかへ、はないづる、よだれ流し、はらいたみ、くだりはら、元氣衰へ力無き等、その他四季流行病、山羊、豚、家畜等に効同じ	炭酸水素ナトリウム2.25g センブリ末0.07g ゲンノショウコ末2.50g コロイドカルシュウム5.00g	秋田県製薬株式会社
13	霊将湯	子宮病、血の道、産前産後、月経不順、冷え込み、肩のこり、更年期神経症、頭痛、ヒステリー症、眩暈、四季引風	カンゾウ0.5g ケイヒ0.5g ゲンノショウ1.2g トウキ1.0g センキュウ1.2g ソウジツ1.5g コウブシ1.5g シャクヤク 2.0g コウカ0.3g チクセツニンジン0.3g	秋田県製薬株式会社

5. 展示構成と概要、主な展示資料

導入部では、3章「自然のめぐみ」で紹介する植物の写真のスライドショーをスクリーンに投影した。



写真1 導入

①1章「くすりの広がり」

ここでは、様々な立場の人がどのようなものを薬として使ったのか、どのように薬を作ったのか伝えることを目的とした。それぞれのコーナーの概要を述べる。

■武士の服薬事例——薬の服用の記録は、事例は多くないが、秋田藩の記録や藩士の日記などに服薬の記録がみられる。それらによると、症状やその軽重に応じて、様々な薬を使用しており、薬が生活の中である程度普及していたことが分かる。病人の症状と用いた薬、その原料の生薬を用いて示した。



写真2 武士の服薬事例

■秋田藩の薬園——久保田城の近くにあった御薬園本園の位置を示し、栽培された植物を薬園設置と同時期に刊行された本草図譜にて紹介した。秋田藩では9代藩主佐竹義和の時代、寛政7

年（1795）に医学館を設置して、2年後には医学館で製薬事業を開始した。その後、薬草の確保、本草学の研究などを目的に文政3年（1820）に台所町（現秋田市千秋矢留町）に薬園を設置した。薬園は文政5年から医学館の附属施設とされた。120種以上の薬用植物が栽培されたとする記録がある。

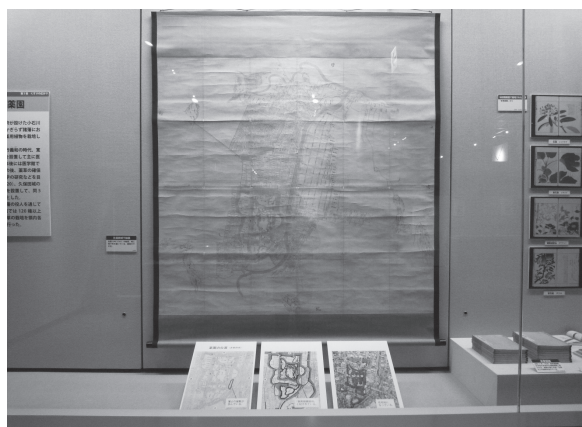


写真3 秋田藩の薬園

■角館の武家とくすり——角館武家屋敷「石黒家（仙北市角館町）」に伝来している医療道具を展示した。また角館出身であった秋田蘭画の中心作家小田野直武が挿絵を描いたことで知られる解体新書等を展示した。



写真4 石黒家に伝来する資料

江戸時代、薬を取り扱うには漢書を読む能力が不可欠であり、武士や宗教者などの知識層が医療の担い手になりやすかった。石黒家には7代直愿の書付のある医書や薬種が伝来する。直愿の次男、高橋痘庵は藩内で種痘を広めた人物である。また、小田野直武の次男の三立は、秋田藩の医学頭も務

めている。

■村びととくすり——肝煎をつとめた茂木家（湯沢市）、五十嵐家（大館市）の資料から薬箱や調剤道具を展示し、肝煎が地域で医療行為を担っていた例として紹介した。医者のいない集落が多かった時代、肝煎が医薬を学び、医療を施すことがあった。茂本文助は慶応4年（1868）に医者株を取得し、久保田の医師稲見家で学び、村で医療活動を行った。五十嵐家では幕末の先祖が漢方医だったと伝えられ、明治～昭和40年代初めにかけて、地域で医療活動を行っていた。

■阿仁マタギとくすり——重要有形民俗文化財に指定されている「阿仁マタギの狩猟用具」の中から製薬道具・薬の行商道具を展示した。また、ここでは秋田県製薬株式会社の薬も展示した。



写真5 マタギのくすり

■カッパのくすり——江戸時代の薬は霊験をうたったもの、秘伝とされているものが多い。県内にはカッパから伝えられたとされる家伝薬がある。ここでは、金田家（北秋田市合川）、鷹背家（大仙市太田）の製薬道具や薬の原料、効能が書かれた版本などを紹介した。

■置き薬——富山や滋賀の置き薬の袋や箱、土産などを展示し、秋田藩での富山の薬売りについて紹介した。秋田藩では国富の流出とみなして県外からの薬売りを規制したが、人びとが富山の薬を求めたため、完全に閉め出すことはできなかった。

■唐松神社のくすり——病を予防、治療するために宗教者の祈祷や護符を頼りにすることがあった。唐松神社は「女一代の神」ともいわれ、出産や子育て、婦人病にも御利益のある神社として、

県内外の女性に特に信仰された。薬も女性に関連したものが作られていた。ここでは、効能書きや唐松神社の信仰に関する道具を紹介した。



写真6 唐松神社のくすり

■古代の祈り——ここでは、薬壺と同形の発掘品や秋田城跡から見つかった人形など古代の祭祀に用いられた資料を展示した。秋田城は出羽国を統治するために律令国家が設置した役所で、ここで疾病が流行ったために仏典を読んだことを示す木簡や、疫病の進入を防ごうとしたと推定される祭祀に使われた道具が出土している。

■まじないでなおす——神社や寺に足形、手形、絵馬等を奉納して、病氣平癒や健康を祈願する風習を紹介した。

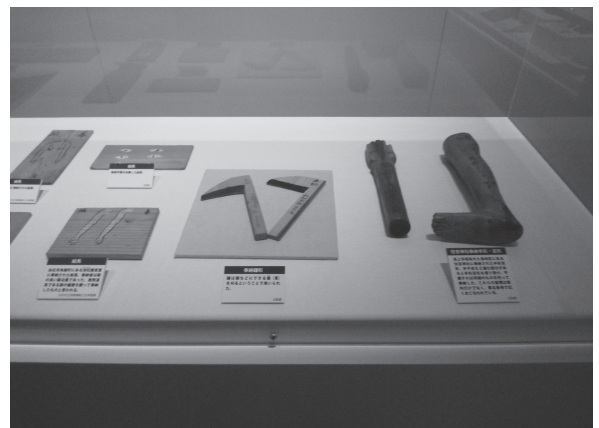


写真7 まじないでなおす

2章「町のくすりやさん」

ここでは、舂屋薬局（秋田市）、藤井薬局（大仙市大曲）、旧村田薬局（横手市増田）を取り上げ、看板、製剤道具、効能書き、薬局で使われた道具を紹介し、村田薬局の薬棚や看板等を用いて昔の

薬局をイメージした再現展示を行った。



写真8 薬局のイメージ展示



写真9 薬看板

明治以降、看板などの広告や、新聞・雑誌などの様々なメディアで薬の宣伝が盛んになった。薬局・薬店が薬をはじめ、さまざまな日用品も扱い、地域の住民が困った時に比較的気軽に相談できる場所であったことも取り上げた。咳を鎮め、痰を切る薬として有名な龍角散は、もともと秋田藩の薬であったと伝えられている。創業家の藤井家は明治初期には、大仙市と東京で薬を製造販売し、やがて東京を本店とするようになった。大仙市では、現在も藤井薬局が営業しており、東京本店は製薬企業に発展して現在の株式会社龍角散となっている。また、ここではオブラートの発明に関わった山下太郎（横手市出身）についても取り上げた。

3章「自然のめぐみ」

ここでは、県内で採取した薬用植物の実物を乾燥させ展示した。民間薬として使われてきた薬用植物のうち、効能効果が確かであり現在でも医薬

品として利用されているものについては、その内容も付記した。



写真10 自然のめぐみ

現在は、顆粒剤等の利用しやすくなった漢方薬が流通しているが、もともとは原料となる植物等を煎じて利用するのが主であった。顆粒剤ができるまでの製造工程を示し、伝統医学が現代に改良されながら活かされている例として紹介した。その他、県内市町村（美郷町、八峰町）や秋田県立大学の生薬栽培の取り組み、天然物から抽出された薬用成分、遠藤章氏（由利本荘市出身）のスタチンの発見についてパネルで示した。

④「くすりの広場」

ここでは、体験や紹介される話題を通して展示全体を身近に感じてもらうことを意図した。薬研を使うコーナー、行商の荷物（行李）を背負うコーナー、秤ではかるコーナー、年中行事の薬（お屠蘇）のにおいを嗅ぐコーナー、薬の通り道になる体内消化器系のパズルのコーナーを用意した。

身近な生薬として七味唐辛子、鹿角の伝統的染色（茜染め・紫根染め）と薬効について紹介した。



写真11 行商の荷物

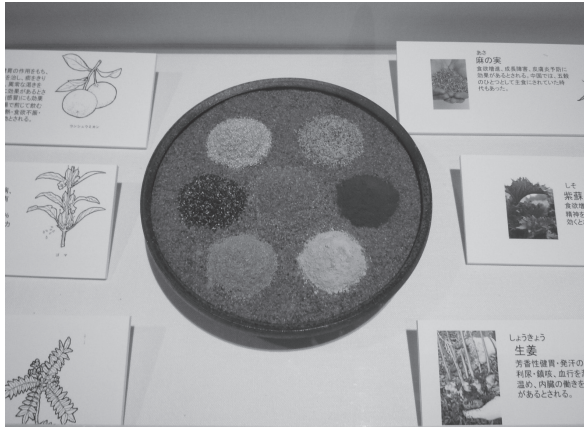


写真 12 七味唐辛子の七味

七味唐辛子は江戸時代の中ごろに作られ、地域や扱う店によって組み合わせられる生薬の七味が異なっている。

鹿角の紫根染めは古くから朝廷への献上品とされてきたものの一つである。現在、紫根には、痔に有効な成分が含まれていることが知られているが、古い記録の中に痔疾の療養中の友人に贈ったとする記録がある。

展示資料は、所蔵者の家で先祖から大事に受け継がれてきたものが多く、所蔵者自身が家の歴史を調べていることもあり、様々なご教示をいただくことがあった。

阿仁マタギの動物由来薬原料については鈴木英雄氏により、家伝の製法で作成いただいた。また、膨大な数の薬用植物資料は、佐藤隆氏より採集加工していただいた。薬用植物は、それぞれ薬効の高い時期が異なるため、採集時期もばらばらである。採集を行うためには、何処に、何があり、いつ採集時期を迎えるのか把握していなければならず、山野草の生態に詳しい佐藤氏の協力を得たことにより会期直前までに他種類作製できた。また、植物は乾燥させると量が小さくなるので、展示での見栄えを考え、乾燥することを見越して多めに採取した。採集するにあたっては、できるだけ綺麗な形で取り出せるように注意を払って行い、特に根茎の採取は資料が傷つかないように丁寧に土を掘り起こし、取り出した後は慎重に土を洗い流した。資料の乾燥は、薪ストーブを用いてカビが生えないように夏季であっても火を絶やさないと

うにして2～4週間かけて行った。高温でしっかりと乾燥させたため、自然乾燥に比べ色味が残りと、鮮やかにすることができた。

展示資料の中には、香りの強い生薬が多く、準備期間には生薬独特の香りが室内に漂った。なお会期中は展示ケース越しの展示であったため、一部の生薬については、香りを楽しむための携帯ケースを準備し、適宜職員が来館者に対応した。

＜主な展示資料＞

1章「くすりの広がり」

■武士の服薬事例

…処方（安神散、八珍湯、葛根湯、独参湯）の構成生薬、『傷寒論』

■秋田藩の薬園

…久保田城下絵図、羽州久保田大絵図（写真画像）、『本草図譜』

■角館の武家とくすり

石黒家（仙北市角館）…佐竹分家紋付薬箱、薬さじ、鍼箱、薬種

…『解体新書』、着色不忍池図（画像）、『烏帽子於也』

■村びととくすり

茂木家（湯沢市）…百味箆筥、薬鍋、往診用薬箱、乳鉢、乳棒、書状

五十嵐家（大館市）…往診用鞆、薬包紙、漏斗、調合用薬品、薬（龍角散）、聴診器

…箱ふるい、薬箱

■阿仁マタギとくすり

阿仁マタギの製薬・行商道具…熊胆、熊の骨の黒焼き、熊の頭骨、熊の血、熊の脂、ムササビの肝、マムシの肝、マムシの日干し、薬研、脂とり包丁、ふるい、胆のし板、行商用行李、行商鑑札、会津絵図、印籠

秋田県製薬関係資料…薬を入れる置き袋、薬箱、薬（牛馬専門薬、せき薬、順血五香湯、活腸胃散、ミッテル散、猿頭ミッテル散、大正散、消炎散、源太膏）

■カップのくすり

金田家（北秋田市）…効能書き、効能書き版木、薬研、薬原料（粉末）、匂ばかり、行商鑑札、掛軸（カップ）、感謝状、薬袋

鷹觜家（大仙市）…薬筆筒、薬舗整理箱、こね鉢、さじ、薬（消炎散、龍起散）

■置き薬

…薬箱、薬袋、土産のおもちゃ

■唐松神社のくすり

…掛け軸（唐松神）、鈴の緒、燭台、講人名簿、神札（愛子大神、易産安全）、効能書き、看板

■古代のいのり

…墨書土器、胞衣壺、小型短頸壺、人形、馬形、弓形、刀形、絵馬

■まじないでなおす

…住吉神社奉納足形、手形、絵馬（向かい目、腰下）、絵馬の版木、疱瘡除けのサンダワラ、赤べこ

2章「町のくすりやさん」

■外屋薬局（秋田市）

…看板（紫雪、ちのくすり、神薬、仁丹、宇津救命丸）、百味筆筒、陶製ピーカー、上皿天秤、薬袋、薬広告、販促品（日めくり暦）

■藤井薬局（大仙市）

…薬袋（下痢止）、薬袋（脚気）、薬袋（皮膚外傷）、御薬方之写
龍角散資料…看板、幟、薬、効能書き、販促品（ミニノート、ミニ本）、薬箱、歴代テレビ広告映像

■旧村田薬局（横手市増田）

…看板（中将湯、ロート製薬、天壽丸、ポプラーメンターム）、薬舗名入り温度計、薬舗名入り半被、薬舗名入り番傘、そろばん、調剤袋、軟膏入れ（ブリキ、プラスチック）、薬包紙、家伝薬（浄明散）の薬袋・薬書・効能書き、眼科医の薬箱、ガラス容器

■薬局で扱われたもの

…効能書き（太田胃散、寶丹、人参補腎湯）、入浴剤（中将湯）、薬（アイジ、退虫丸、小児下剤、小児疳散）、アンプル剤（医療用検査試薬、エスタロン）肝油ドロップ包み紙、養命酒陶器瓶、養命酒ガラス瓶、オブラート、カプセル、ほ乳瓶、粉ミルク缶（滋養糖、金太郎コナミルク）、伊吹もぐさ

3章「自然のめぐみ」

■植物等（乾燥させた実物）

…ウツボグサ、タムシバ、カラスビシャク、クララ、トチバニンジン、オニノヤガラ、ウド、チョレイマイタケ、キササゲ、イノコヅチ、ミツバアケビ、ニガキ、キハダ、クワ、オウレン、ドクダミ、ゲンノショウコ、キバナイカリソウ、センブリ、カリン、マタタビ（虫こぶ）、トウモロコシ、ソメイヨシノ、タラノキ、ギシギシ、ツリガネニンジン、オオイタドリ、サイハイラン、ユキノシタ、クリ、モモ、イチジク、ヒメアオキ、クワ、サンショウ、イヌザンショウ、ニワトコ、イチイ、クロバナヒキオコシ、アオツヅラフジ、オトギリソウ、カワミドリ、ヨモギ、アキカラマツ、カナムグラ、ツチアケビ、冬虫夏草（エタノール標本）

■生薬標本

…ブクリョウ、オウギ、オンジ、ニンジン、キキョウ、サンヤク、カンゾウ、ビャクジュツ、シャクヤク、センキュウ、トウキ、ジオウ、ケイヒ、ソウジュツ、カッコン、タイソウ、マオウ、ショウキョウ、モッコウ

■製造工程標本

…大建中湯（構成生薬見本、エキス粉末見本、エキス顆粒見本）

■その他

…培養オウレン

「くすりの広場」

…薬行商行李、七味唐辛子構成生薬、屠蘇散、人体図解図（画像）、茜染め端切れ、紫根染め端切れ、紫雲膏

6. 付帯事業

■特別講演会「現代にいきる伝承薬～龍角散」

平成26年3月1日（土）、午後2時30分～4時に、公益社団法人東京生薬協会会長、株式会社龍角散代表取締役社長の藤井隆太氏をお招きし、講演いただいた。開催決定から2週間足らずの短い広報期間であったが、約150名の参加者があり、盛況であった。「龍角散が秋田とつながりがあり驚いた」「海外から日本の伝承薬が注目されてい



写真 13 キッズファーマシー

ることや生薬栽培についてよくわかった」等の感想がよせられた。

■キッズファーマシー in 博物館

～子どものための薬剤師体験会

平成 26 年 3 月 23 日（日）、午前 10 時～午後 3 時まで、一般社団法人秋田県薬剤師会の協力を得て行った。薬剤師体験は、展示開催前から応募があり、事業開催のおよそ 1 か月前には 100 名の定員に達する人気であった。会場、博物館 2 階ロビーは終日親子連れでにぎわった。

■講話「お薬の話」& お薬相談

平成 26 年 3 月 23 日（日）、午前 10 時～午前 11 時、午後 13 時 30 分～14 時 30 分、一般社団法人秋田県薬剤師会所属薬剤師から、講話いただいた。普段使っている薬に関する疑問点や注意点など、丁寧に解説していただいた。

■企画展「くすり今昔物語」ギャラリートーク

ギャラリートークは展示担当者が、展示期間中 5 回実施した。

■紙芝居「かっぱのおんがえし」～かっぱから伝えられた薬にまつわる昔話（金田家）

展示期間中、わくわくたんけん室にて 3 回、企画展示室にて 10 回実施紙芝居を実施した。

紙芝居は、金田京子氏（北秋田市合川）が先祖から伝えられてきた伝承を題材にしたもので、子供から大人まで多くの方が紙芝居に足をとめた。終了後に、金田家の資料を改めて見直す方が多かった。

7. アンケートの実施と会場での聞き取り

（1）会場の様子

来館者数が減少する冬期の開催であり、「来館しやすい時期にもう一回やってほしい。」「道路状況は悪いがもっと PR して多くの人に見せたい。」という声があったが、総数 10,780 人と、この時期にしては多くの方の来館があった。職員ができるだけ展示室にいるようにし、来館者の様子をみながら対話の中で資料の背景を伝え、興味の喚起を心掛けた。その際に多くの体験談を頂戴した。使用している薬用植物としてドクダミ、ゲンノショウコ、センブリをあげる人が多く、それ以外では、火傷にアロエ、腹痛にオウレン、利尿にニワトコをあげる人がいた。自分が使っている実物を持ってきて下さる方もいた。

会期中、何度も展示室へ通う人も見られた。将来医師になることを目指す小学生が、違う友人、親戚を連れては何度も来館し解説することもあった。体験コーナーでは、薬研で 10 分以上もすりつぶし続ける様子も見られた。

（2）展示期間中にアンケートを実施し、446 名の回答を得た。次に項目ごとの回答について記す。

回答者の年齢層をみると 70 代以上が 18%、60 代が 24% と多く、ついで 10 代未満が 15% であった。20 代が 3% と極端に少ないが、すべての世代から回答をいただいた。

回答者の性別は、男女ほぼ同程度であった。どのように展示情報を知ったかについては、「ポスター、チラシ」が 25% と多く、次いで「新聞」20%、「テレビ」18%、「来館して」13%、「知人から」9%、「ホームページから」5% の順になった。過去の当館の例と比較すると、新聞・テレビなどのマスメディアからの情報が大きかった。また通常の広報に加え、県内各薬局での協力の効果も大きかったことがうかがえた。

回答者の居住地については、秋田市が 64% を占め、次いで潟上市などの周辺の地域、展示品と関係のある大仙市などが多かった。また、東北近県の他、新潟、長野、群馬、神奈川、栃木、東京都などにお住まいの方からも意見をいただいた。

展示の難易度については、「やさしい」31%、「ちょうどよい」61%、「難しい」8% であっ

た。一方で、「もっと深く掘り下げて欲しかった」「もっと秋田に特化してほしい」という意見も少数あった。

資料数については、「多い」24%、「ちょうどよい」70%、「少ない」6%であり、感想の中に「多くて良かった」もあったことから、満足のいただける資料数であったと推察できる。展示の満足度については、「満足」83%、「ふつう」17%であり、不満が少数であった。医療・健康に関する展示の開催を希望するかという問いには「はい」が86%と非常に大きく、健康への関心の高さがうかがえた。

その他、印象に残ったコーナーを問うと、回答は様々であったが特に薬の原料となった動物由来資料（阿仁マタギの薬）や植物資料には関心が高く、10代未満、10代の回答者には体験コーナーの関心が高かった。

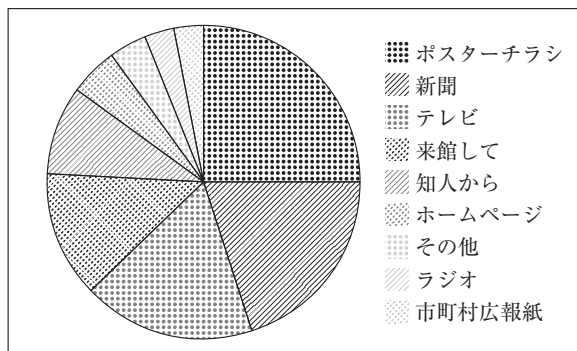


図3 展示を何で知ったか

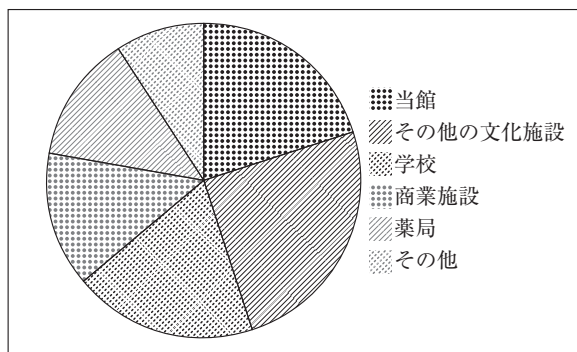


図4 ポスターを見た場所

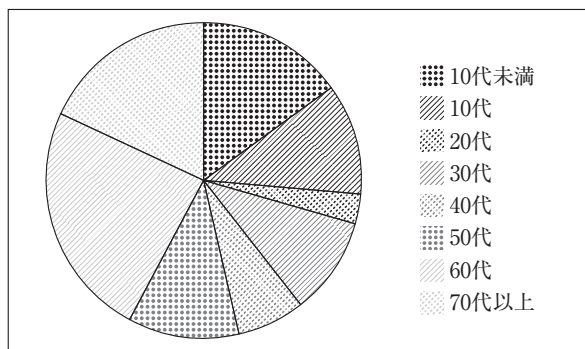


図1 年齢

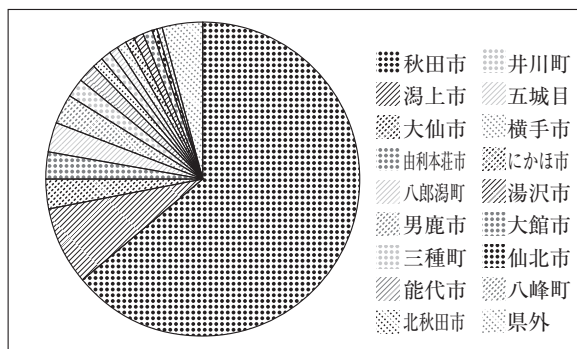


図5 住まい

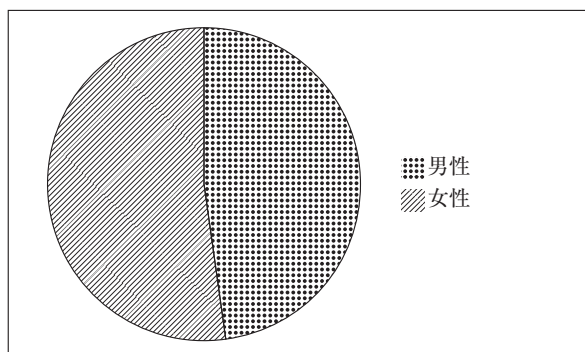


図2 性別

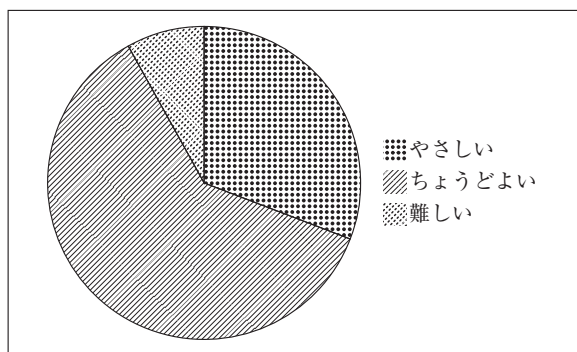


図6 難易度

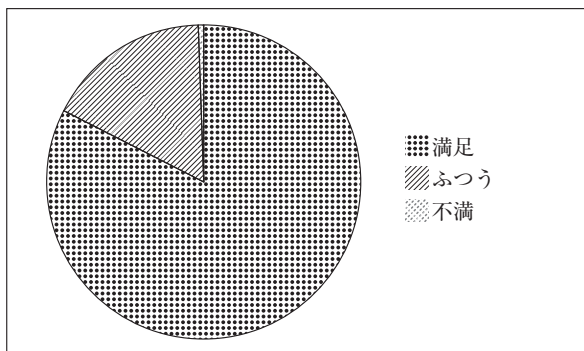


図7 満足度

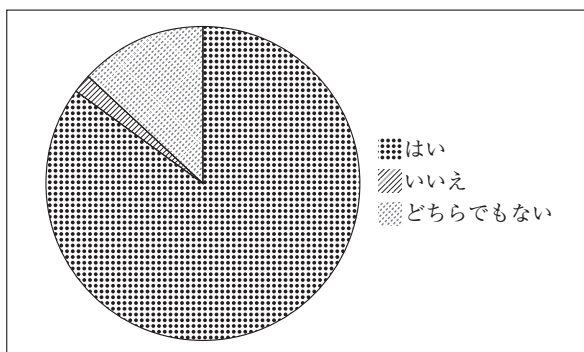


図8 医療・健康に対する展示がみたいか

8. 終わりに

薬を題材にした今回の展示は、期間中の来館者からは多くの反響があった。展示室内の様子とアンケート結果から、来館者とともに医療文化を振り返る・掘り起こすということに対し一定の効果を示したと考える。また、身近な医療というテーマへの関心の高さを知るとともに、研究の深化を望む声、学びの機会として展示の再開を期待する声は今後の調査への励みとなった。展示終了後の現在も関係資料を郵送して下さる方や、関連の話題や情報を提供して下さる方も多く、感謝している。

今回の県内の薬資料に関する調査は、まだ始まったばかりであり、全域にわたって資料調査を行ったわけではない。また、展示においても一部を取り上げたにすぎない。今後も調査を継続し、多くの方から御教示頂きながら地方における過去の医療活動の一面を明らかにしていきたい。

最後に、本展示に協力頂いた全ての機関、協力者の皆様に改めて感謝したい。特に植物資料作製に御協力頂いた佐藤隆氏、展示調査全体において御教示頂いた吉田慶嗣氏に感謝の意を表したい。

